

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 6月12日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02401

研究課題名(和文) 18・19世紀転換期の身体表象 ヘルダー・ゲーテとパフォーマンス芸術

研究課題名(英文) The Corporeal Images in the Transition Period between 18th and 19th Centuries - Goethe, Herder and the Performing Arts

研究代表者

武井 隆道 (TAKEI, Takamichi)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10197254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀末から19世紀初頭のドイツにおける代表的な思想家、文学者であるゲーテ・ヘルダーの作品に現れる身体についての言説やモチーフを分析し、当時の古典主義美学のギリシャ的身体観との関連を探るとともに、バレエやタブロー・ヴィヴァンなどのパフォーマンス芸術における身体表現のこの時代の新しい動きとの共通点を探った。その結果、時間、空間、存在を巡るゲーテやヘルダーの思想と、当時の舞台芸術家の身体が生き生きとした生身の身体に見えるようにする技法とが、相互に影響し合っていること、ゲーテの文学作品の中には言葉による身体存在イメージの実験が見られることがわかった。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the corporeal motives in the works of J. W. Goethe and J. G. Herder in order to search the problems which are related to the Grecized aesthetic of the classicism as well as the common thoughts of Goethe and Herder with those of the contemporary artists of the performance arts such as ballet and tableaux-vivants. As the result we have found, that the discussions and techniques of the performing artists in this ages to show the body vivid have a close relation to Goethes and Herders thoughts on the time, space, and existence.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ゲーテ ヘルダー 身体 舞踊 タブロー・ヴィヴァン 古典主義

1. 研究開始当初の背景

18世紀後半のドイツ古典主義の身体観は、ヴィンケルマンによるギリシャ美術の称揚を契機に、静止的、固定的な調和の身体に美を見出すとされてきた。しかし近年の研究の進展により、大理石の内部にまで浸透する視線が却って物質性の中に生命性を喚起するようなイメージがこの時代に見られることがわかってきた。一方ゲーテ、ヘルダーの著作中に、表現された記号としての身体が再び生命性、存在性を獲得するというモチーフが頻繁に見られること、また同様のモチーフが同時代の舞踊理論書や演劇実践の中にも見られることにわれわれは注目してきた。

研究代表者の武井は、ゲーテの諸作品に見られる身体モチーフを研究してきた。特に『イタリア紀行』とそれに関連する美学論、建築論において、身体の実在性と記号性、身体の社会的コミュニケーション的側面と自立的存在論的側面の矛盾止揚という問題を巡るゲーテの考察を探ってきた。同時に同じく『イタリア紀行』に記載され、後に『親和力』においてモチーフ化されるアチチュードとタブロー・ヴィヴァンを取り上げ、その時代背景や実演をヴァイマル宮廷におけるゲーテの活動と関連づけて探ってきた。

研究分担者の濱田はヘルダー、特に彼の人間形成(教養 Bildung)の哲学における身体の問題に多大の関心を寄せてきた。特に身体記号性と存在性の関係、視覚と触覚の問題を巡って研究を積み重ねている。

2. 研究の目的

18世紀末から19世紀初頭の芸術における身体イメージの、古典主義から市民的な肉体的現場に即したものへの変化の過程を、主としてドイツ語圏の事例に則して、ヘルダー、ゲーテの思想、文学との関係を踏まえながら、次のような観点から明らかにすることを目的とした。

1) 当時の演劇パフォーマンス(タブロー・ヴィヴァン、アチチュード、バレエ)に見る古典的身体表象から市民的身体表象への移行

2) ヘルダーとゲーテの著作に現れている身体と時間の問題、並びに存在と仮象の問題。

3) 上記1と2の関係。

18世紀後半にヴィンケルマンによって称揚された古典的身体美の観念が一般市民にも広まり、その理想がタブロー・ヴィヴァン(Tableaux Vivants)やアチチュード(Attitüde)、バレエというパフォーマンス芸術にも影響を与えようになったが、ヘルダー、ゲーテのこれらの演劇領域への関わりを洗い出すとともに、ヘルダーからゲーテへと受け継がれた身体に関する思想、特に存在と仮象の関係、ならびに身体における時間の問題が、これらの演劇実践においても重要な創作原理となっていることを確認する。

さらにつぎのような仮説の妥当性を検証する。

ヘルダー、ゲーテの身体思想は、当初古典主義的な身体イメージ(ギリシャ的、男性的)をもとに展開されていたが、両者の身体観の中には、19世紀的の新たな市民的身体観、すなわち、個人性、社会性、女性性をもった身体に通じる方向性があるのではないか。たとえばヘルダーは『彫塑』(1778)『人類歴史哲学の諸理念』(1784-91)において人間の身体と風土・歴史の関係について論じている。ゲーテにおいては『若いヴェルターの悩み』のロッセ、『遍歴時代』の教育州、オッティエリ工等々。そしてこの新しい身体観への移行が、アチチュード、タブロー・ヴィヴァン、バレエで表現されている身体イメージと共通性を持っているのではないか、ということである。

3. 研究の方法

基礎知識の共有と仮説形成のため、ヘルダー、ゲーテの著作を研究代表者と研究分担者に大学院生を加え読み合わせる。研究の前提となる仮説をいくつか形成する。研究協力者の助言を仰ぐ。資料収集としてドイツで資料を収集し、読み込み、成果を論文化し批評し合う。シンポジウム等で議論を深める。研究協力者の批評を仰ぐ。報告書を作成し、論文を学術雑誌に発表する。

ゲーテとヘルダーの身体観に決定的な影響を及ぼしたイタリア体験を跡づけるため、ローマ、ナポリ、シチリアの関連都市、施設を訪れ、資料を収集する。特にアチチュードの実演をゲーテがじかに見聞したナポリのハミルトン邸を訪問する。

われわれのテーマにとっては、ゲーテとヘルダーの彫塑論が決定的意味を持つ。ローマのヴァチカン博物館には、彼らが詳細に探求したラオコーン、ベルヴェデーレのアポロ、ヘラクレス像等があるので、これらをじかに見学する。併せて、ナポリ考古学博物館等で、ギリシャ・ローマの彫刻の代表的作品を見学し、ヴィンケルマンの古代的身体イメージの淵源を探る。

またアチチュードの創始者エマ・ハミルトンの事蹟を追跡するために、出身地のイギリス、チェシャー州を訪れる。研究期間中の2016年8月と9月には、ドイツ、デュッセルドルフのベルリッツ離宮と、イギリス、グリニッジの海事博物館でエマ・ハミルトン展が開催されるので、これも見学する。

ドイツヴァイマル市 Klassik Stiftung Weimar(Anna Amalia Archiv) Goethe-und Schille-Archiv Weimar を訪問し、資料収集を行う。

国内並びに国外研究協力者を招いて、公開シンポジウムと公開ゼミナールを開催する(筑波大学)。

最終的には19世紀初頭の身体表現がいかに

肉体性を獲得して、近代の市民性を生の現場において表象したかという新しい視点から、研究の総合を行い、その成果を論文集としてまとめて発表する。

その他、研究協力者には随時連絡を取り、助言を仰ぐ。

4. 研究成果

2016年8月に、武井と濱田は、ヴァイマルのアンナ・アマリア図書館とゲーテ・シラー文庫を訪れ、資料収集を行った。またゲーテが宮廷におけるパフォーマンスを行った現場の一つであるヴァイマルのティフルト離宮を訪れた。デッサウ近郊のヴェルリッツ離宮は、後述するナポリのハミルトン邸を模したヴィラが建てられているなど、エマ・ハミルトンのアチチュードのドイツにおける受容の一例であり、ここも訪れ見学と資料収集をした。また武井はその後イギリスに渡り、エマ・ハミルトンに関する展覧会が開催されていたグリニッジの国立海事博物館で見学と資料収集をしたほか、チェシャー州ネストンの、エマ・ハミルトンの生地を訪れた。

2017年3月には武井と濱田は、イタリアのローマとナポリ、そしてシチリア島を訪れ、見学と資料収集を行った。

ローマではゲーテの住居であったコロソ通りのゲーテ博物館を訪れ見学と資料収集を行った。ラオコーン像やベルヴェデーレのアポロ等、ヘルダーとゲーテにとって重要な意味を持つ彫像が置かれているヴァチカン美術館を訪れ見学と資料収集を行った。

続いてナポリのかつてハミルトン邸であった Palazzo Sessa を見学し資料収集をした。ここは現在ナポリ・ゲーテ・インスティテュートが使っており、所長のモレーゼ (Maria Carmen Morese) さんならびに文化広報担当のヴァント (Johanna Wand) さんが歓迎してくださり、たいへん丁寧な説明を聞くことができた。ここに甚大な謝意を表したい。

ナポリではそのほか、古代ギリシャ、ローマ彫刻の豊富な作品を有する国立考古学博物館を訪れ、見学と資料収集を行った。

シチリア島では、ゲーテの『イタリア紀行』に記された古代遺跡の地セジェスタ、アグリジェント、タオルミナ等を訪ねるとともに、『イタリア紀行』中ゲーテの身体観を伺う上で重要な記述がなされているパレルモの聖ロザリアの洞窟と、パレルモ近郊バゲリアのパラゴニア王子邸を見学した。

2017年9月28日には筑波大学人文社会学系棟において、シンポジウム『18・19世紀転換期の身体』を開催した。

これには研究協力者になっていただいているベルリン自由大学ガブリエーレ・プラントシュテッター教授から推薦のあった同大学助手マリヤマ・ディアグネさんを講師としてお招きした。彼女の講演のタイトルは、『浮遊の振り付け - 18・19世紀の重さを巡る舞踊の

技術と語法』 „Choreografien des Schwebens. Techniken und Topoi der Gravit as im 18. und 19. Jahrhundert.“ であった。

ディアグネさんの略歴は次の通りである。

1982年ドルトムント生まれ。2002年から2004年奨学生としてニューヨークのハーレムダンスシアターでネオクラシックバレエ、モダンダンスを専攻。また舞踊史、音楽史、解剖学を習得。2005年から2008年パイロイト大学に在学、演劇論ならびにメディア研究で修士号取得。2008年から2011年ベルリン自由大学に在学、舞踊学修士号を取得。2012年よりベルリン自由大学演劇学科のプラントシュテッター教授の講座で助手を務めている。

研究者としては、19世紀から20世紀初頭のアヴァンギャルドを経てコンテンポラリーダンスまでの舞踊が、ピナ・パウシュに代表される20世紀ドイツ・タンツテアターの成立にどのように関連しているかをたどっている。またピナ・パウシュ財団の学術顧問として、アーカイブ・プロジェクトにも従事しているほか、奨学金事業に携わっている。さらにベルリン自由大学とベルリン国立バレエ団との共同事業である「バレエ大学」設立の仕事に、プラントシュテッター教授とともに関わっている。

ディアグネさんにはまた、シンポジウムの翌日9月29日に、コンテンポラリーダンスのワークショップを筑波大学体育館で行っていただいた。体育専門学群の舞踊専攻学生を中心に50名ほどが参加した。ディアグネさんはコンテンポラリーダンスの基本的な身体の動かし方を指導した後、日常生活の場面を演出するパフォーマンスを課題として、コンテンポラリーダンスの振り付けを具体的に指導して下さった。

国内の大学からは、次のお二人に講演をお願いした。

嶋田洋一郎氏 (九州大学教授) はドイツ啓蒙主義を中心としたドイツ哲学を専門とし、特にヘルダー研究では日本国内の第一人者である。タイトルは『ヘルダーのイタリア旅行 - ゲーテとの関連を中心に』であった。

森立子氏 (日本女子体育大学准教授) は18世紀フランスのバレエの研究者で、特にジャン・ジョルジュ・ノヴェールの専門家として著名である。講演のタイトルは『身体への視線 - ジャン・ジョルジュ・ノヴェールの場合』であった。

さらに濱田真が『ヴィンケルマンとヘルダーにおける古代ギリシア芸術受容の問題』、武井隆道が『シチリアのゲーテ - 身体記憶・社会の記憶』というタイトルで発表を行った。

特にディアグネさんの講演により、ゲーテとヘルダーに取り組んできたわれわれの探求が、19世紀初頭のロマン主義とその背後の市民社会の身体観という位相へとつながった。また森さんの講演によって、同じくわれわれの研究と、同時代のバレエ改革運動との

関連が明らかになった。

2017年5月立教大学で開催された日本ヘルダー学会特別企画において濱田は『思想』(岩波書店 2016年第5号)掲載の濱田の翻訳と解題「ヘルダー『イメージについて』」および論文「ヘルダーにおける発見術と記憶術」について、武田利勝氏(九州大学准教授)と田邊恵子氏(早稲田大学助手)からの批評を受け議論を行い、「イメージ Bild」や「発見術 Heuristik」に関するヘルダーの思想について考察した。

濱田は笠原賢介氏(法政大学教授)の『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界・クニッゲ、レッスン、ヘルダー』(2017年未来社)への書評を『ドイツ研究』(52号、日本ドイツ学会、169-172ページ)に発表した。

これらの成果を2018年3月、報告論文集に発表した。ここに濱田は『彫像を観るということ - ヴィンケルマンとヘルダーにおける古代造形美術鑑賞の問題を中心にして』、武井は『パレルモのゲート - 物語の基盤としての身体と空間』の論文を執筆掲載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

武井隆道「パレルモのゲート - 物語の基盤としての身体と空間」査読なし、「18・19世紀転換期の身体表象 - ヘルダー・ゲートとパフォーマンス芸術」報告論文集 2018年3月 29~44頁

濱田真「彫像を観るということ - ヴィンケルマンとヘルダーにおける古代造形美術鑑賞の問題を中心にして - 」査読なし、「18・19世紀転換期の身体表象 - ヘルダー・ゲートとパフォーマンス芸術」報告論文集 2018年3月
頁: 15~27頁

濱田真「『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界 - クニッゲ、レッスン、ヘルダー』笠原賢介著 未来社 2017年」査読なし(書評) 日本ドイツ学会『ドイツ研究』52号、2018年3月 169~172頁

濱田真「ヘルダーにおける発見術と記憶術」査読あり、岩波『思想』5 No. 1105、2016年5月 19~35頁

濱田真「ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー著 イメージについて」査読なし(翻訳と解題) 岩波『思想』5、No.1105、2016年5月 158~170頁

濱田真「彫刻が動き出す時 - ヘルダーの彫塑論における身体表象と時間性的問題」査

読なし、日本独文学会研究叢書 107『18・19世紀転換期における身体表象とその表現 時間の流れと静止の中の身体』2015年5月 3~15頁

武井隆道「ゲートとタブロー・ヴィヴァン並びにアチチュード」査読なし、日本独文学会研究叢書 107『18・19世紀転換期における身体表象とその表現 時間の流れと静止の中の身体』2015年5月 16~31頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井 隆道 (TAKEI Takamichi)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 10197254

(2) 研究分担者

濱田 真 (HAMADA Makoto)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 50250999

(3) 連携研究者

()
研究者番号:

(4) 研究協力者

嶋田 洋一郎 (SHIMADA Youichirou)
九州大学教授
森 立子 (MORI Tatsuko)

日本女子体育大学准教授
ガブリエーレ・ブランドシュテッタ
(BRANDSTETTER, Gabriele)
ベルリン自由大学教授
マリヤマ・ディアグネ(DIAGNE Mariyama)
ベルリン自由大学助手
アノ・ムンゲン (MUNGEN Anno)
パイロイト大学教授
村山 久美子 (KUMIKO Murayama)
早稲田大学非常勤講師